

期間：平成28年11月2日(水)～11月30日(水)

場所：愛知県立大学

長久手キャンパス図書館1階ロビー

主催：愛知県立大学文字文化財研究所、稀書の会、
愛知県立大学長久手キャンパス図書館

協力：安城市歴史博物館

<企画展示>

「愛知県史を彩る俳人たち2

～士朗・卓池・秋挙らと五仲庵～」

【俳諧の隆盛と俳人たちのつながり～五仲庵有節と『芳新集』】

江戸時代後期、尾張・三河のみならず、日本全国に俳諧が広がると、俳諧の書として、発句集、連句集、俳論書、日記など、数多くの冊子が残されます。本学図書館には、多くの貴重な俳諧の書があるのですが、俳諧資料と言う際には、俳書以外に、点取俳諧や月次俳諧の資料、俳人の短冊や書簡、それから、番付や一枚刷、さらには、画賛、俳額や文台のように図書ではない文芸資料も含まれます。こうしたさまざまな形態の享受資料は、なかなか保存されにくく、家々の代替わりの時期に、たやすく処分され失われてしまうものです。こうした、簡単に失われやすい文芸資料を見つめることで、全国津々浦々に広まった俳諧文化の底力を実感することができるでしょう。今年の俳諧展示では、俳諧文芸の幅広い享受のあり方を、理解していただけたらと思っています。

さて、文化・文政期頃から、全国の有名俳人を網羅した、「俳諧番付」が盛んに作られるようになります。相撲番付を真似た「俳諧番付」は、多くの種類があり、たいそう流行したようです。「新板諸国はいかいし大角力ばん付」は、そうした俳諧番付の一枚です。行司役も含めて大関、関脇、小結…と、著名な俳諧師が並ぶ中、前頭に、三河の(鶴田)卓池・(中島)秋挙の名が見えます。彼らの名声がわかりますが、また別の観点から見れば、付けられた順位には編者の主観が入ることは避けられません。それゆえに、こうした番付には、順位に不満な人々からのクレームとトラブルもつきものでした。

全国規模の俳諧師たちの交流は、有力俳人が広く各地の俳諧愛好者の句を募集し、撰集に掲載することからも感じとれます。中でも、近畿俳壇の大立者五仲庵有節は、『芳新集』を長年にわたり刊行しました。五仲庵の編纂した句集には、日本各地の俳人が名をつらね、俳諧の世界の広がりが実によくわかります。

もちろん、卓池も秋挙も句集に名を載せていますが、五仲庵はさほど有名ではない三重の俳人たちとも深い交流を持っていました。それがわかるのは、本学の図書館貴重書『芳新集』挟み込みの書簡です。そこには、五仲庵が、投句してきた俳人相手に、彼の句の載った出来立ての『芳新集』を送ると伝え、加えて自分の最近の句についても感想・批評を教えてくれと書いています。小さな手がかりですが、ここから、句集に名がある三重の俳人^{ほんぼく}畚麦や麦子が、五仲庵の句の募集に応じて、『芳新集』に投句し句を入れてもらったこと、そして実は、今私たちが見ている本学の貴重書の最初の所蔵者であったことがわかってきます。百七十年以上前に出版された本が、自分の句が入っているはずの句集をわくわくしながら待っていた地方の俳人のところに、編纂者からどんなふう届けられたか、手紙から読みとることができ、またあらためて当時の人々の広いネットワークも感じられるでしょう。

【尾張・三河の俳人たち～士朗門弟の広がり～卓池・秋挙の活躍】

さて、尾張・三河の俳人のみならず、広く東海地方の俳人たちが入門し多大な影響を受けた俳人が井上士朗です。尾張の暁台に師事し、寛政の三大家に数えられる有力俳人でした。今回の展示では、安城市歴史博物館から、士朗のものであったという文台^{ぶんだい}をお借りしています。文台は一人前の俳諧師となったあかしに持つものであり、俳諧の場では、執筆^{しゅひつ}が懐紙を置いて用いました。文台の中では、例えば芭蕉の好んだ^{ふたみがたぶんだい}二見形文台が、非常に有名です。西行が二見ヶ浦で扇を敷いて文台にしたという逸話にちなみ、表面に伊勢国の二見ヶ浦と松の扇子の絵、裏面には芭蕉の二見の句が書かれたものでした。今回の展示の文台は、寿老人の絵と、裏面に梅の句、そして士朗の名が見えます。

士朗は多くの弟子を育て、その弟子たちのネットワークの広がりも特筆すべきことでした。士朗の弟子として代表的な俳人に、岡崎の鶴田卓池と、刈

谷の中島秋挙がいます。両者はまたそれぞれに、士朗のあとを継いで、三河や知多に多くの弟子を持ちました。例えば、文政七年(1824)に、卓池と秋挙が花園山につどい、春を過ごした際、たくさんの弟子たちが、句を持って訪れてきています。この時の日記である『弥生日記』は、日本文化研究の院生と教員とからなる愛知県立大学稀書の会で読み進めており、成果は訳注として『文字文化財研究所紀要』に掲載していますが、日記に記された数多くの弟子たちの名に、卓池と秋挙の影響力の大きさが感じられます。

弟子たちの重要な仕事に、師の句集の編纂があります。士朗の句集は、卓池・秋挙・松兄ら高弟たちが分担して『枇杷園句集』として編纂しており、さらには卓池と秋挙とが『枇杷園句集後編』を編纂しています。また、士朗亡き後も、機会あるごとに卓池と秋挙が士朗追善の句集を編み続けました。卓池は士朗七回忌の追善句集『たかむしろ』を編纂していますし、また士朗の有力弟子の一人である松兄の句集『名なしぐさ』をも、松兄の死後に編纂しています。かつて士朗、松兄、卓池は、一緒に東海道を江戸に旅しており、途中駿河国清見が原を過ぎた際には、芭蕉が心を寄せた連歌師宗祇・宗長にも思いを馳せていました(『鶴芝集』)。こうした俳人師弟のつながりの強さが、句集の編纂に携わる様子からうかがえます。

また、卓池は、俳画にも堪能でした。五仲庵有節に画の心を問われ、「紙上みな画にして、素なる所甚易からず、たとへば俳諧の余韻のごとし」と答えたといひます(『夕沢集』^{ゆうさくしゅう})。卓池の俳画は、岡崎市立図書館の鶴田卓池文庫のデジタルアーカイブから手軽に見ることができ、また今回お借りした安城市歴史博物館にも多く所蔵されています。

秋挙も士朗十三回忌追善句集『安居鐘』を編みましたが、また別に、芭蕉の門人惟然坊の句風にひかれ、彼の句集を編纂しています。惟然坊は、紅梅をめで「梅の花赤いは赤いは赤い花」と詠んだり、冬の句で「水鳥やむかふの岸へつういつうい」と詠むなど、思いのままに口語調の句を作った俳人であり、秋挙は「惟然以前惟然なし、惟然以後惟然なし」と評しました。このような異風の俳諧師に心ひかれたところに、秋挙独自の感性がうかがえます。

【稀書の会実地踏査】

今年度の稀書の会では、碧南市文化財課のご協力を得て、中根榎堂(榎老)

ゆかりの中根佑治様宅にて、『榊堂句帖』や短冊、画賛、秋挙など俳人たちからの手紙、屏風など貴重な資料をお見せいただき、ご説明もいただきました。矢作川が流れる三河の地に、梅を愛し、梅林のある庵を結んだ榊堂の旧宅跡にも案内していただき、矢作川につながっていたという水路(現在は半暗渠)を見て、句集に残る風雅な船遊びの句を実感することができました。さらに、中島秋挙の刈谷市小垣江の曙庵跡を見学し、安城市歴史博物館にて、卓池と秋挙の画賛、屏風、短冊など、多くの所蔵品をお見せいただきました。中根様、碧南市文化財課、安城市歴史博物館のご好意により、学生・院生ら共々、地域に有する多くの文化財に実地に触れることができ、心から感謝いたします。

(日本文化学部国語国文学科 伊藤伸江)

※ 実地踏査に参加した学生による報告を最終ページに掲載しています。

【参考文献(主なもののみ)】

伊藤善隆「江戸俳諧の黄金時代」第14回「俳諧番付」の流行(『俳句』平成23年第60巻第3号)

矢羽勝幸「翻刻 有節自撰『五仲庵有節句集』」(『二松学舎大学東洋学研究所集刊』第25集・1994)

碧南市史料第57集『三河の俳人 中根榊堂』(碧南市史編纂会・平成2)

企画展『近世三河の俳諧:卓池・秋挙・榊老・塞馬』(安城市歴史博物館・1993)

大磯義雄『蕪村・一茶その周辺』(八木書店・平成10)

岡本勝『近世三重の俳人たち』(おうふう・2000)

<展示資料一覧>

(1) 『新板諸国はいかいし大角力ばん付』

安城市歴史博物館蔵

文化8(1811)年

相撲番付に寄せて、出版当時に生存している諸国の俳諧師の力量を示した変わり番付である。俳諧の全国的な流行により、有名な俳諧師を網羅してランク付けした番付が製作され、俳諧人の師事・行脚・交流の目安ともなった。前頭に、三河の卓池、秋挙、伊勢の椿堂などの名が見える。文化・文政期から幕末にかけて多く刊行されるようになり、俳諧の盛んな名古屋では一国版も刊行されている。



(2) 『^{うりめいげつ}瓜名月』

乙由ほか著 百川編

元文4(1739)年

享保13年、師の^{おつゆう}乙由の上洛を迎えた
^{ひやくせん}百川(昇角)が、^{ごちゆう}吾仲らとともに催した
京都広沢の月見の雅会の歌仙および発句
を収めたもの。

^{さかき}彭城百川(1697-1752)は名古屋で生まれ、若いころは俳諧を学び、その後、京都に出て南画を学んだ。俳諧と絵の両方をよくしたということで、^{ふそん}蕪村などにも影響を与えたと言われている。



長久手キャンパス図書館しおり

オープンキャンパスなどで配布している
スタッフ作成しおり。
この兎の絵は、当館の貴重書をデジタル化
している「愛知県立大学図書館 貴重書コ
レクション」の「古俳書」コレクションで
も、バナーとして使用しています。



(3) 『^{ほうしんしゅう}芳新集』

五仲庵有節編

初編：弘化2(1845)年 二編：弘化3(1846)年 三編：弘化4(1847)年
四編：嘉永元(1848)年 六編：嘉永三(1850)年

幕末から明治初期にかけて近畿地方で活躍した俳人、^{ごちゅうあんゆうせつ}五仲庵有節が、
諸国俳人から発句を募集し刊行した撰集。俳人の在国別に句が配列さ
れ、例えば第四編には、三河から塞馬、流芝、蓬宇、遠江から烏谷と、
地元の有力俳人が入集している。弘化2年に初編を刊行後、安政3年
(1856)まで10編が刊行された。

本学図書館所蔵の『芳新集』は、挿込書状より推察して、おそらく三重
県津の俳人^{ほんぼく ぼくし}畚麦・麦子の所蔵にかかるもの。選者有節から冊子を送付さ
れた際、入集した句には朱点がつけられている。

(4) 『芳新集』第四編(027/09/2) 挿込 麦子宛五仲庵有節書状

時下弥御安逸奉賀候
然者小集出板則入
御覽候猶御作御もら
し奉希候先者右申
上度草略頓首

十月 五仲庵

麦子君

几下

低う出て日もかけ
らふや霜燈り
たつまては千鳥と
知らす昼の雨
水仙やひとり
あまる夜の薫

御評可被下候

(翻刻は堀川貴司慶応大学教授(文字文化財研究所客員共同研究員)による)

幕末から明治初期に近畿地方で活躍した有力俳人である五仲庵有節(一八〇五―一八七二)から、伊勢の俳人麦子にあてた手紙。有節は、伊勢俳壇に大きな影響力を持った。麦子は、生没年不明だが、『発句類題伊勢海』には、「安濃郡・ツ」の人として畚麦と共に紹介されており、津の俳人である。おそらく畚麦の子か。この手紙は、『枇杷園句集』挿込の、有節が畚麦にあてたものと全く同じ文面、句である。有節は、畚麦・麦子それぞれに彼らの句の載った『芳新集』第四編を送ったが、畚麦宛の書状は、畚麦によって後に『枇杷園句集』に葉としてはさみこまれたのである。参考として「枇杷園句集挿込 畚麦宛五仲庵有節書簡」(昨年度貴重書展示にて紹介)を掲出した。

本状で有節が麦子に意見を求めている三句、二年後の『芳新集』六編を送るにあたり記して意見を求めている三句は、いずれも推敲を経た後に自撰の『五仲庵有節句集』に入れられている。自撰句集の成立年代は不明であるが、少なくとも『芳新集』六編刊行の嘉永三年(一八五〇)十月以降であることが判明する。

(5) 『芳新集』第六編(027/10/2) 挿込 畚麦宛五仲庵有節書状

弥御安全奉賀候然者
小集上梓則御作加入
仕候間入御覽候猶御文
音奉希候先ハ右申
上度早と頓首
卯月 五仲
畚麦君

几下

おほろ気のけさは
離てきりの花
二羽かともきくや
あらしのほととぎす
また名なき洲にも
時得て麦の秋

御評可被下候

(翻刻は堀川貴司慶応大学教授(文字文化財研究所客員共同研究員)による)

五仲庵有節が、年刊撰集の『芳新集』を刊行し、伊勢国の俳人畚麦ほんぼくに送るにあたり、

添えた手紙。畚麦ほんぼくは生没年不明であるが、『発句類題伊勢海』には、「安濃郡・ツ」の人として麦子と共に紹介されており、三重県津の俳人とわかる。『芳新集』に麦子と並び入集しているところからも、親子など近い関係にある二人と推察される。また、並んで入集した二人の句には、朱で庵点がつけられている。

最後に書き添えられた有節の三句は、有節自撰『五仲庵有節句集』夏の部に、三句すべて入っている。

二羽かとも聞やあらしの子規
また名なき洲にも時得て麦の秋
朧気のけさははなれて桐の花

(6) 『芳新集』第六編(027/11/2) 挿込 畚麦宛烏谷書状

薄暑御坐候処益
御多祥奉怡慶候小生
無事御休神可被下候
こたひ小集相催候呈
机下候御高評可被遣候
ちと／＼御近作相聴所
希御坐候右迄草と頓首
四月十二日 烏谷

畚麦様

葉さくらや肘に
敷わる筆のさや
吹れ来て蝶も
めくりぬ花御堂
卯の花のおほろ
さますや水の音
貴評可被下候

(翻刻は堀川貴司慶応大学教授(文字文化財研究所客員共同研究員)による)

烏谷は、讃岐丸亀の出で、後に遠江見附に住んだ俳人。尺樹庵と号した。生没年は未詳。卓池の門人で、卓池が天保十四年(一八四四)に粟津義仲寺へ芭蕉墓参の旅をした際に、同道している(『於椎集』)。また、弘化三年(一八四六)に津の俳人大川春魚が編纂した『発句類題伊勢海』に、遠江の俳人として句を掲載してもらっており、幅広く活躍している。ちなみに、『発句類題伊勢海』には、三河俳人として塞馬、流芝、蓬宇、遠江俳人として烏谷と杜水が句を載せており、『弥生日記』に句を載せている卓池門流の俳人が、三重の俳人たちと交流していたことがわかる。『芳新集』第六編には、後半に烏谷の参加した両吟歌仙が三卷存し、それゆえ、『芳新集』第八編からも津在住の俳諧仲間である畚麦に送られたのであろう。なお、天保十二年(一八四三)の序を持つ『烏谷集』が、西尾市岩瀬文庫に存する。

(7) 『枇杷園句集』坤冊(027/37/2) 挿込 畚麦宛五仲庵有節書状

時下弥御安逸奉賀候
然者小集出板則入
御覽候猶御
作御もらし奉希候先者右申
上度草略頓首
十月 五仲庵
畚麦君

几下
低う出て日もかけ
らふやしも燈
たつまては千鳥と
知らす昼の雨
水仙やひとりに
餘る夜の薫り

御評可被下候

(翻刻は堀川貴司慶応大学教授(文字文化財研究所客員共同研究員)による)

五仲庵有節ゆうせつ(二八〇五―一八七二)は、幕末から明治初期に近畿地方で活躍した有力俳人。畚麦は伊勢の俳人。伊勢俳壇は近畿俳壇の影響が強かったようである。本書館は五仲庵編纂の『芳新集』も貴重書として所蔵するが、『芳新集』にも畚麦宛の五仲庵の手紙が挟み込まれており、編書を介しての両者のやりとりがわかる。この手紙も五仲庵が畚麦に句集を贈った時のもの。畚麦が『枇杷園句集』に葉代わりにはさんだのであろう。

有節自撰『五仲庵有節句集』冬の部に、推敲の後と見られる次の三句がある。
低う出て日も陽炎ふや霜の原

立ぬ間八千とりと知らす昼の雨

茶亭閑座

水仙やひとりにをしき夜の薫り

びわえんくしゅう
(8) 『枇杷園句集』

士朗著 椿堂・宇洋・卓池・蕉雨・松兄編

文化1(1804)年

ちんどう たくち しょうう しょうけい
椿堂・宇洋・卓池・蕉雨・松兄がそれぞれ分担して編集した士朗の
発句集。

いのうえしろう (1742-1812) は名古屋の産科医。国学を本居宣長、俳諧
を加藤暁台にまなび、ほかにも漢学、絵画、平曲をよくした。

すずきみちひこ えもりげつきよ
鈴木道彦、江森月居とならんで寛政の三大家と呼ばれた。

展示箇所では、文化6(1809)年のこととなるが、碧南の俳人中根榎
堂(榎老)をたずね、矢作川で舟遊びをし、「はつ雁のおのが空問ふ夕
ぐれや」という句を詠んでいる。本年度稀書の会の実地踏査では、
榎堂ゆかりの中根様宅にて、多くの俳諧資料をお見せいただいた。

(9) 『井上士朗文台』

安城市歴史博物館蔵

文台は、連歌・俳諧の興行の際に置かれ、
硯箱、懐紙を乗せる机。執筆がその前にす



わり懐紙に句を書き留める。俳諧の宗匠になった証の持ち物が文台
であり、芭蕉の持っていた二見形文台が有名。二見形文台には、伊
勢の二見が浦と松の図柄の扇子が描かれ、裏面は芭蕉の「うたがふ
な潮のはなも浦の春」という「ふたみ」の句が描かれているが、こ
の文台には表に寿老人の絵、裏には「月や春はるやこよひの梅の花」
の句が士朗により墨書されている。

(表面)



(裏面)



(10) 『^{ななしぐさ}名なし草』

松兄編、卓池校

文化6(1809)年 江戸時代

^{しょうけい}松兄の遺編を、息子の^{たくち}竹丸の依頼で卓池が刊行したもの。松兄(1767-1807)は、名古屋正覚寺の住職。俳諧を^{きょうたい}暁台と^{しろう}士朗に学んだ。

(11) 『^{やよいにつき}弥生日記』

鶴田卓池・中島秋挙編

文政7(1824)年 江戸時代

^{たくち}卓池五十七歳、^{しゅうきよ}秋挙五十二歳の春、三河の名所を連れ立ってめぐった後、花園山麓に寓居し、弥生の一月あまりを花をめでながら俳諧ざんまいにすごした折の日記である。風雅な俳諧生活の記念に同年五月、名古屋の書肆本屋久兵衛から刊行した。

花園山では、蕉風を慕って、^{きかく}芭蕉・其角らの初懐昏「鶴の歩み」にならぬ、まず両吟五十韻を張行した。その後は、多くの門人の来訪を受け吟遊。亡き師^{いのうえしろう}井上士朗をしのび、芭蕉七部集の一である『炭俵』を読み、さらに滞在の終わり頃には、それを範として歌仙をまいている。

(12) 『^{いぜんぼうくしゅう}惟然坊句集』

秋挙編

文化9(1812)年 江戸時代

^{いぜん}惟然の旧居弁慶庵を訪ねた^{しゅうきよ}秋挙が、巴圭の勧めにより、惟然の句文や書簡、逸事などをまとめたもの。

広瀬惟然(?-1711)は江戸前期の俳人。美濃国関の人。芭蕉の門人で、芭蕉最後の旅に支考らとともに随行した。芭蕉没後は諸国を行脚し、その後故郷に庵を結んで隠棲した。

(13) 『たかむしろ』

卓池編

文政1(1818)年 江戸時代

井上士朗いのうえしろうの七回忌に出された追善集。卓池たくち、秋拳しゅうきよ門下の三河俳人の句が主になっている。

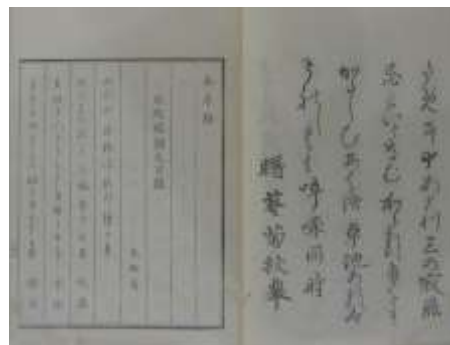
(14) 『安居鐘』

あんどのかね

安城市歴史博物館蔵

井上士朗の十三回忌に、岡崎誓願寺にて俳諧興行をおこなった際の追善句集。句集名は脇起俳諧百韻の立句とした士朗の句「西風や水鶏啼夜の鐘の声」から。

秋拳や卓池、碧南の中根樸堂(樸老)、刈谷の俳人鶴見東雅、加藤茂陵らの句を載せ、秋拳・卓池の追悼発句、弟子の四季混雑の発句、士朗の描いた蘭、竹、富士の図も載せている。



(15) 『卓池「ありありと」画賛』

安城市歴史博物館蔵

軸装

卓池たくちは門人石川貫河から画を学び、南画風のやわらかな色調の画を描いた。

五仲庵有節(→展示資料4、5、)に画の心を問われ、「紙上みな画にして、素なる所甚易からず、たとへば俳諧の余韻のごとし」と答えたという(『夕沢集』ゆうさわしゅう)。

本掛軸は、『青々処句集』せいせいしよくしゅうに入る「ありありと影見て聞きくや杜鵑ほととぎす」の句と、山河に住む隠者の姿を穏やかに描いている。書は、右肩下がりの丸い字に特徴がある。



稀書の会 実地踏査報告

